



「ココが知りたい」。国際協力に関係する  
いろんなトピックを分かりやすく解説します!



表紙写真: マラウイで活動する青年海外協力隊員 (撮影: 今村健志朗)

ODA政策

「2014年版政府開発援助 (ODA) 白書」

## 60年の歩みを 次の成長へ

日本政府が3月に公表した「2014年版政府開発援助 (ODA) 白書」。2014年に60周年を迎えたODAの道筋とは。

〈目次(一部抜粋)〉

### 第 I 部 ODA60周年—日本のODAの成果とこれからの方向性

- 第 1 章 日本のODA が築いてきたもの
  - 第 1 節 日本のODA の軌跡
  - 第 2 節 60年でなし得たこと—日本のODA の成果
- 第 2 章 これからの日本の開発協力

### 第 II 部 2013年度の政府開発援助実績

- 第 1 章 実績から見た日本の政府開発援助
- 第 2 章 日本の政府開発援助の具体的取組
  - 第 1 節 課題別の取組
  - 第 2 節 地域別の取組
  - 第 3 節 援助実施の原則の運用
  - 第 4 節 開発協力政策の立案および実施における取組

### 第 III 部 資料編

毎 年、前年度を中心とした政府開発援助 (ODA) の実績や今後の展望などを外務省が取りまとめている年次報告書「政府開発援助 (ODA) 白書」が公表された。今回は、2014年に60周年を迎えたODAの成果を振り返った上で、今後の日本の開発協力の方向性を説明する内容となっている。

最初に年代ごとに、ODAの役割や課題、それを取り巻く国際情勢の変化などを紹介。ODAは日本の経済成長に伴い量的に拡大し、さらにグローバル化の進展により開発課題が多様化するようになったことで、求められる役割が変化していったという歴史が記されています。また日本がリーダーシップを発揮した具体例として、保健医療、防災をはじめ、アフリカ開発会議 (TICAD) に代表されるような地域別の取り組みなどが挙げられています。

また、今年2月に閣議決定された新しい「開発協力大綱」も紹介されています。小島しよ国のように所得水準だけでは計れない、特別なせい弱性を持つ国への支援を含め、質の高い成長とそれを通じた貧困削減や、地球規模課題への取り組みを通じた持続可能で強じんな国際環境の構築などを重点課題として掲げ、「国際社会の取り組みをリードし、日本を含む国際社会の平和と繁栄をより確かなものにしていく役割を果たしていく」としています。



フィリピンで、小児呼吸感染症の実態調査のため家庭訪問をする現地の看護師と玉記雷太専門家 (写真: 谷本美加)



モザンビークの首都マプト近郊のマングローブ園で、現地スタッフと樹高計測結果を確認する森林管理能力強化アドバイザーの井上泰子さん (写真: 永武ひかる)



国連世界食糧計画 (WFP) タンザニア事務所働く唐須史嗣さん (右端)



東ティモールで開かれた国連開発計画 (UNDP) 平和構築事業の会議に出席する横山雅子さん (右から2人目)

国 連などの国際機関で働きたい。そんな夢を抱く優秀な日本の若者を対象に、外務省・国際機関人事センターは、「ジュニア・プロフェッショナル・オフィサー (JPO) 派遣制度」を実施しています。

JPO派遣制度は、将来的に国際機関の正規職員として勤務することを志望する日本人を対象に、日本政府が派遣に必要な経費 (給与・手当など) を負担するというもの。原則2年間、各機関で職員として勤務することで、必要な経験を積みながら人脈を形成し、最終的に正規職員としての採用を目指します。

## 「JPO派遣制度」 世界を舞台に 働きたい若者にチャンス!

まで。応募資格は35歳以下 (2015年4月1日現在) で、外務省が派遣取り決めに結んでいる国際機関の業務に関連する分野の修士号を取得、または2015年9月末までに取得見込みであること。また、修士号取得分野に関連する職種において、2015年9月末までに2年以上の職務経験 (アルバイト・インターンを含まない) が必要で、英語で職務遂行が可能であることが条件です。

ODA政策

## Message from Cambodia 青年海外協力隊、50年の歴史



協力隊員の中村さんとの思い出を語るトンさん (2014年10月撮影)



1960年代のナショナルチームの選手たちと中村さん (前列中央) とトンさん (右端)

JICAカンボジア事務所 — 木村文 広報アドバイザー —  
青 年海外協力隊の派遣が始まって50年。カンボジアは、日本が初めて青年海外協力隊員を派遣した国の一つで、これまで600人を超えるJICAボランティアが活動してきました。

今回はその中から、初代派遣隊員としてカンボジアで水泳指導に取り組んだ中村昌彦さんと教え子のヘム・トンさんをご紹介します。中村さんがカンボジアに降り立ったのは1966年1月。まだ内戦前で、首都プノンペンには東南アジアのパリとも呼ばれた美しい街でした。「とにかく厳しい指導者でした。当時水泳のナショナルチームの選手だったトンさんは、中村さんの指導

ぶりをこう振り返ります。練習中にもかかわらず泣いていたこともあったとか。トンさんはその後のボル・ポト時代を生き抜いた、数少ない教え子の一人。破壊され尽くしたこの国で水泳の復興に取り組んだ彼の出発点となったのが、中村さんに学んだ厳しくも理にかなった指導法でした。

カンボジアは今、空前の投資ブームですが、国づくりはまだ途上です。中村さんは2009年に69歳で亡くなり、トンさんも今回の取材を受けて間もなく、今年1月に72歳で亡くなりましたが、こうした協力隊員の軌跡は開発途上国の人々と、共に生きるという原点を伝えてくれます。

現地からのメッセージは、ODAメールマガジン (www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/mail/) でご覧いただけます。